

〈歴史の思考〉をさらに進めるために
 ——『デリダ 歴史の思考』補遺——

To Promote “a Thinking of History”:

Supplementary Remarks on

Derrida: A Thinking of History

亀井 大輔*

拙著『デリダ 歴史の思考』（法政大学出版局、2019年）の合評会が、同年3月に立命館大学にて開催された。本稿は、この合評会での評者の発表を受けて、著者があらためて自著を振り返り、再論するものである。

合評会では、松田智裕氏、宮崎裕助氏、郷原佳以氏から、本書に対するさまざまな指摘を受けた。デリダ研究における本書の意義や基本的な成果については、概ねのところ一定の評価をいただいたようだ。他方で、本書の課題設定に由来する限界、なされるべきであったにもかかわらず達成されなかった課題、あるいは本書の先に浮上しうる課題についても、多くの指摘をいただいた。

ひとつの著作を成立させるにあたって、その著作が果たすべき課題を設定すること、つまり議論の範囲を限界画定することは、必要不可欠である。指摘されたような、1950年代の最初期および1970年代以降のデリダについての詳論や、本来なら取り組まれるべきヘーゲルやフッサールなどについての議論を、本書は課題から捨象している。むしろ、こうした限界を定めることでかろうじて一著として成立しえたわけであり、以上の捨象は本書の内在的な限

* 立命館大学文学部准教授

界を如実に示している。そのことを具体的に指摘していただき、著者としても残された多くの課題を新たに自覚することができた。

あらためて述べれば、本書の狙いは、デリダの1960年代の思想形成を〈歴史の思考〉というモチーフによって解明することにあった。歴史の問題は、筆者のデリダ研究が当初から有していた主題のひとつであったが、「あとがき」でも少し述べたように、本書が〈歴史の思考〉という観点を打ち出すことにした直接的なきっかけは、デリダの1964 - 65年の講義『ハイデガー——存在の問いと歴史』（以下『ハイデガー講義』と略記）が2013年に刊行されたことにある。したがって著者の関心は、この講義という新資料をふまえて、1960年代の思想の形成過程を新たに描き出すことに主に向けられた。そのこと自体、デリダ研究をめぐる時代的制約を受けたものであるが——よく言えば、本書は講義原稿の刊行というデリダ研究の現況を反映しており、逆に言えば、講義資料がさらに公になるにつれて本書の内容も彫琢や修正を余儀なくされるだろう——、その成果にもとづき、デリダ思想の全体像に迫るさらなる努力や、20世紀ヨーロッパ思想のなかで、さらには西洋の哲学史のなかでデリダの思想が持つ意味の解明が求められるだろう。

ここからは、合評会での指摘に逐一応答することは叶わないが、三氏の評を踏まえつつ、本書に対する補遺として、不十分と思われた点を補足するとともに、今後の研究に向けて、若干の補助線を引いておきたい。

1 アイノスとエピステーメー——システムの観点から

デリダの歴史をめぐる基本的な構図を素描するために、本書の序論では、〈エピステーメーとしての歴史〉と〈アイノスとしての歴史性〉とを区別した（『デリダ歴史の思考』6頁以下。以下、同書の参照は、頁数のみ記載する）。前者は、知をテロスとする運動として表象された、形而上学的な歴史の概念である。後者は、前者を可能とし、かつ不可能ともする条件として、

エクリチュールによって開かれる歴史性である。「エピステーメー」(知)と「アイノス」(言葉・歴史の意味だが、謎とも結びつく)はいずれもデリダのテキストに登場するギリシア語であり、対照的な意味合いをもつため、活用することにした次第である。

松田氏の提起した問いのひとつに、この区別についての疑念があったが、たしかに本書の説明は不十分なものであり、両者の関係についてはさらなる解明が必要であろう。ここで補足的にそのことに取り組んでおきたい。

そのために、「システム」の観点を導入する。

まず、本書12頁で引用し、〈アイノスとしての歴史性〉という呼称の典拠とした箇所前後の文章を手がかりにしたい。デリダは次のように述べている。「シニフィアンは、他の助けを借りずまったく単独で、私よりも先に、私が言いたいと思うことがら以上のことを語る」(ED 266/359)¹⁾。本書でも強調したように、言語が発語者の〈言わんとすること (vouloir-dire)〉とは異なる意味を伝えうるということを、デリダは以上のように表現し、それを「シニフィアンの自律性」と呼んでいるのだが、注目すべきことに、そのことが次のように「システム」と形容されているのである。

シニフィアンの自律性とは、意味の地層化や歴史的潜勢化であって、それは歴史的なシステム、言い換えるなら、どこかで開いているシステムなのである。(ED 266/359f.)

システム(体系)という語は、形而上学的な概念として受け取るならば、ある中心や超越的な項によって統制され、秩序立てられた階層的なシステムを想起しがちである。しかし上記箇所におけるシステムとは、そうした形而上学的なシステム概念とは異なり、シニフィアンの示差的運動のシステムであって、そこに超越的・中心的なシニフィエの存在は前提とされていない。

したがって「シニフィアンの自律性」とは、別の論考における言葉を用い

れば、「超越論的シニフィエの不在」(ED 411/569)——それは「遊び・戯れ(jeu)」とも呼ばれる——と別物ではない。シニフィアンが別のシニフィアンへと回送し続け、シニフィアンの究極的な終着点となるようなシニフィエはどこにも存在しないという、エクリチュール(さらには記号、マーク)の全般的な回送システムのことである。そのことによって、シニフィエはシニフィアンから独立しては現前しえない。デリダによれば、それが「言説」としてのシステムである。

言説とは、言い換えるなら、システムであって、このシステムにおいては、中心的、起源的、超越論的なシニフィエが、諸々の差異からなるシステムの外部に絶対的に現前することは決してない。超越論的シニフィエの不在は、意味作用の領域と遊びを無限に拡大していく。(ED 411/568f.)

このシステムは「ひとつの構造的全体性」ではあるが、「構造的全体性は起源的なものと終末論的なものをまぬかれ、それらを自分自身のうちに記入し刻印する」(ED 180/239)。したがって、このような言説のシステムのなかで、発語者の〈言わんとすること〉は、起源もしくはテロスとしてシステムの外部にあるのではなく、このシステムの項のひとつとしてシステムのなかに書き込まれるのである。

確認すれば、こうしたシステムのなかに、ある中心項や超越項を設定しようとする動きこそが、形而上学的な運動である。「歴史」に関して言えば、示差的システムとしての歴史(アイノスとしての歴史性)に起源やテロスを設定することこそ、歴史を形而上学的に概念化すること(エピステーメとしての歴史)である。

こうして、ひとつのシステムのなかに、起源やテロスといった超越項を要請する運動と、それとは反対に、差異を全般化する遊びの運動という、二つ

の両立しえない運動があることになる。これをデリダは、歴史についての「二つの解釈」(ED 427/590)として描き出している。ひとつは、形而上学的な歴史概念へと向かうものであり、「遊びからも記号の次元からも逃れていく真理や起源の解読を試み、その解読を夢見て、解釈が必要であるという状況を、あたかも流謫地にいるかのごとくに生きている」ような解釈である。もうひとつは、反対に、遊びを拡大していく方向であり、「もはや起源の方に向かうことはなく、遊びを肯定して、人間と人間主義の彼方へ赴こうと試みている」ような解釈である(ED 427/590)。

デリダが試みるのは、両者のうちのどちらかを選択するのではなく、両者に「共通の地盤を思考し、そしてこの還元不可能な差異の差延を思考すること」(ED 428/591)である。これこそデリダが「歴史の問い」と呼ぶものであり、本書が〈歴史の思考〉と名づけたものである。ただし、誤解のないように述べておきたいのは、デリダが「二つの解釈」として述べているこの二つは、並置される関係ではないということ、言い換えれば、両者を並列的に置いて眺める視点はどこにもないということである。「哲学者は歴史のなから逃れることはできない」(ED 173/229)という言葉を、ここで想起してもよいかもしれない。哲学者は言語を継承することによって、その言説システムのなかにいるとともに、形而上学的な概念を継承している。したがって哲学者が、形而上学的な歴史概念のなかに差異や遊びによる亀裂を見出すことによって、両者に「共通の地盤」であるところの「差延」はそれとして思考されるだろう。本書で「〈エピステーメーとしての歴史〉のなかに刻まれた〈アイノスとしての歴史性〉の裂け目」(225頁、cf. 13頁)と表現しようとしたのは、このことである。以上を本書序論への補足としたい。

2 後期デリダと〈歴史の思考〉

ここからは、1970年代以降のデリダへと目を向けたい。本書第五章では、

1990年代のデリダに再び〈歴史の思考〉が浮上していることを確認したが、いわゆる後期デリダ思想の豊かな広がりには比べれば、その論述はかなり図式的な議論にとどまっている。デリダの思想全体における〈歴史の思考〉に迫ることが、本書には課題として残されている。

宮崎氏は「いかにして歴史をつくるのか」という問いをめぐって、「系譜学的脱構築」を後期の歴史の問いに相当するものとして提起している。この指摘を受けて、以下では後期デリダにおける〈歴史の思考〉を考えたい。そのために、デリダの発言を二つ引用する。

ひとつは、後年のテキスト『秘密への嗜好』における、「物語を語ることの禁止」についての発言である。本書第二章第一節で論じたように、デリダは『ハイデガー講義』において、ハイデガーの『存在と時間』における「物語を語ること」の禁止を梃子に議論を展開したが、以下ではそれを哲学全般の特徴として捉えている。

哲学には、歴史への異議申し立てを規則的に反復する伝統があります。それぞれの哲学者は、異なる仕方でも、哲学の歴史と手を切る必要があるということから始めました。哲学は、物語を語ること [raconter des histoires] ではない。プラトンはハイデガーはそう述べたのです。その間に、すべての偉大な哲学者は次のように述べることから始めました。すなわち、いまや物語 [récit] および歴史的権威と縁を切ることにしよう、と。かくしてデカルト [は] —— 理性は記憶ではない [と述べました]。カントは同じことを行ないました。ヘーゲルはあらゆるものについての最上の歴史家ですが、しかし経験的な歴史とは縁を切ることを提案しました。もちろんフッサールも、歴史性を解体することから始めました、たとえ次に超越論的歴史性を再導入したとしても。したがって、ある意味では、歴史的記憶の遮断ほど哲学的なものにはもはやないのであって、哲学者のあいだには無歴史主義に関する激化があるのです²⁾。

このようにデリダは、哲学が、「物語を語ること」を拒絶し、経験的、存在者的な歴史から断絶することから始まったと述べている。以上の発言は、1960年代のデリダが対峙した他のさまざまな思想にも当てはまる。挙げられた哲学者のリストに、ルーセ、フーコー、レヴィナスの名前を加えても変わらないだろう。彼らも従来の意味での哲学の歴史から断絶しようとしたからである。つまり、デリダが議論の対象としたのは、「物語を語ること」を拒否することから出発し、何らかの「歴史」から身を剥がそうとした思想家たちなのである。

しかし哲学は、歴史からの断絶を出発点とするだけでなく、歴史から断絶したうえで、そこから独自の歴史を語ろうとする。ヘーゲルは経験的歴史から断絶して、絶対知へと至る精神の運動としての歴史を構想した。フッサールは事史的歴史を還元することで超越論的歴史性に接近した。ハイデガーは存在者的歴史を乗り越えて〈存在の歴史〉に進もうとした。フーコーは理性の歴史から脱却して狂気の歴史を書こうとした。デリダはこうした動向のそれぞれに、歴史主義のアポリアを暴き出したのであり、初期デリダの議論の争点は一貫してこのことにあった。このように、上の引用は、初期デリダにおける〈歴史の思考〉の問題意識に裏打ちされた発言である。

ここで、もうひとつの引用をしておきたい。ある別のインタビューで、「哲学はそれぞれ、歴史上、アナムネーシスというものの解釈であった」と述べた後、デリダは次のように述べている。

プラトンの言説は、本質的に遠征記あるいはアナムネーシス、つまりは諸々のアイデアからなる叡知的な場への遡行です。プラトンの洞穴学における、洞窟における方向転換はアナムネーシスです。ヘーゲルの言説はアナムネーシスです。ニーチェの系譜学もアナムネーシスです。ハイデガー流の反復もアナムネーシスです。今日、哲学を想起しようとすることはすでに、記憶に生じたすべてのことに関する、アナムネーシスに

生起したすべてのことに関する、すなわち、哲学のアナムネーシスの誘惑に関する解釈的記憶の中に巻き込まれることであるわけです³⁾。

以上二つの引用箇所をまとめれば、デリダにとって哲学とは、何らかの歴史からの断絶から始まるが、それとともに、何らかの記憶と想起の営みとも関わるといことになる。この二つの引用の懸隔に、初期デリダから後期デリダへといたる〈歴史の思考〉の進展を見てとることができるように思われる。こうした複数のアナムネーシスに積極的に関わることが——デリダが第二の引用箇所の続きで述べるように——「脱構築のモチーフのひとつ」に他ならないからである。

このアナムネーシスをめぐるモチーフこそ、宮崎氏の指摘する「系譜学的脱構築」と呼ばれるものだろう。というのも、デリダが『法の力』で指摘するように、系譜学的脱構築とは、「脱構築の二つのスタイル」のうちのひとつであり、他のひとつは「論証的な、そして非＝歴史的にも見える行き方にとって、さまざまな論理的＝形式的パラドクスに立ち向かう」ものであるが、それに対し、「それよりも歴史的または想起的であり、テクスト読解、綿密な解釈、および系譜学によって進行するように思われる」⁴⁾ものだからである。つまり系譜学的脱構築とは、記憶・想起に関わる脱構築的な営みでもある。

この脱構築は、しかしながら、忘却された起源へと遡行するといった単純なものではないことは言うまでもない。それは、デリダの言葉を引けば、「現前したことの無い過去の記憶、未来の記憶」⁵⁾にこそ関わるものだろう。したがって——ここで「歴史をつくること (faire l'histoire)」という表現と関係づけるならば——、系譜学としての脱構築は、「歴史をつくるもの」(cf.198頁)としての出来事の系譜学であるとともに、出来事をなさないもの、すなわち「歴史をつくるものなかにはそれ自体の否定的な痕跡の数々しか残さないものの系譜学」でもあるはずである⁶⁾。

以上から、〈歴史の思考〉は後期のデリダにおいて、「物語を語ること (raconter des histoires)」の拒否というアポリアを保持しつつ、いかにして記憶・想起と関わるかを思考することへと展開した、と言えるかもしれない。こうした動向を追求することは、間違いなく〈歴史の思考〉の射程を大きく広げるにちがいない。

こうした動向のなかで、デリダのテキストに「物語 (récit)」という語が登場する。これについて次に少し目を留めたい。

3 歴史と物語

郷原氏は後期のデリダのテキストから、形而上学的言語からの脱却を試みつつデリダが志向する新たな言語として、「ひとつの物語 (récit)」が「可能」であることを「夢見ている」という表現を紹介している⁷⁾。この発言の続きでデリダはこう呟く。「発明すること、言語を発明すること、アナムネーシスの諸様態を発明すること……」。ここから、「物語」とは、記憶を想起するひとつのあり方でもあることが窺える。

デリダにおいて「物語」は「歴史」と関わって言及されることが多いので、この語に注目することで、〈歴史の思考〉に新たなアプローチが可能かもしれない。以下では、デリダが「歴史」と「物語」について述べる箇所をたどることで、その可能性を探ることにしたい。

そのためにまず、ヘーゲルが『歴史哲学講義』で示した Geschichte (歴史) という語の二義性を思い出しておこう。ヘーゲルによれば、Geschichte は「なされたこと (res gestae)」を意味するとともに、「なされたことの物語 (historia rerum gestarum)」を意味する⁸⁾。ヘーゲルは、Geschichte という一語のなかに二つの意味が「統一」されていることに注目する。ヘーゲルにとって、「歴史」と「物語」は不可分な、統一的事象なのである。デリダは『ハイデガー講義』のなかで、このことを次のように説明している。

ヘーゲルにとって、Geschichte というこの語のなかに言語学的偶然はない。なぜなら、歴史の実効性は物語の可能性、したがって歴史学の可能性と同時に出現するからである。Historizität は Geschichtlichkeit のたんなる一様態、究極的で卓越した一変容ではない。前者は後者と同時代的で共 - 実体的なのである。(…) 記憶——ヘーゲルがこの語に与える深遠で生産的な意味における——は、精神そのもの、ムネモシユネー〔記憶の女神〕と Geist〔精神〕、すなわち自己自身を内省し、自己を遺産相続する力能である。この内省〔recueillement〕と取りまとめ〔résurrection〕と物 - 語〔ré-cit〕は、歴史的経験と歴史学に共通の基盤なのである⁹⁾。

ここで注目したいのは、記憶のはたらきと関連して、ré-cit と表記された言葉が、登場していることである。ré- は「再び」を表し、記憶・想起のはたらきと結びつけられていることは間違いない¹⁰⁾。この意味での「物 - 語」は、端的に、すでに起こった事実や存在者を「語る」ことではなく、むしろ歴史の可能性を担うはたらきに位置づけられるだろう。ただし、講義ではこのことに注目は向かわない。

『ハイデガー講義』では、かくしてヘーゲルにとって Geschichte と Historie は同時的であるのに対し、フッサールを経由したハイデガーにおいては Geschichte が Historie に先立つものとされることを、デリダは強調している。こうした議論を経て、本書序論で引用した、『グラマトロジーについて』での Geschichte と Historie についての言及がある。「ある歴史の——歴史学の——対象である以前に、エクリチュールは歴史の、つまり歴史的生成の領野を開く。そして前者（ドイツ語で言えば Historie）は後者（Geschichte）を前提としている」（11 頁に引用）。ここでデリダはハイデガー的な視点を引き継いで、Historie に対する Geschichte の根源性を打ち出していると言えよう。

さて、以上の確認を踏まえて、『時間を与える』（1991 年）のある箇所に注目してみたい。そこでデリダは、「贈与」の問題に絡めてボードレール『パ

りの憂鬱』の一編「にせ金」を読解している。詳細は省くが、「にせ金」という掌編では、一人称の「私」の心中で生じた、友人との関係をめぐる出来事が、独白的に語られている。そこでは、出来事と物語とが区別しえず渾然一体となっていて、いわば語ることによって出来事が生じる。そしてデリダはその読解の途上で、次のように述べているのである。

通りがかりに指摘しておこう。物語 [récit] の可能性が歴史の条件、歴史的出来事の条件であるような状況においては、それがどんな状況であれ、その各々においてこう言うことができなければならないだろう。すなわち、知 (epistémè, historia rerum gestarum, Historie) の条件あるいは知の欲望が、歴史そのもの (res gestae, Geschehen, Geschichte) を生じさせる、と。これは、つねに逆の秩序 (Geschichte がなければ Historie はない) を要請するように見えるヘーゲル的もしくはハイデガー的なタイプの多くの論証と矛盾するのではないとしても、最終的にはその論証を複雑にするかもしれない。もっとも、それは、物語 [récit] の可能性や知の関係の可能性を、出来事の可能性のなかに前もって含ませていたためであるのはたしかであるが¹¹⁾。

以上の論述に、『ハイデガー講義』の内容が反響していることは、いまや明らかである。注目したいのは、ここでは、Geschichte と Historie の序列が、「物語」との結びつきにおいて、ハイデガー的序列から逆転することである。「Historie がなければ Geschichte はない」と言いうるような状況が、そこには描かれている。

さらには、『嘘の歴史』における次の論述を見ておこう。

(1) 嘘の概念の歴史 [une histoire] (Historie)、(2) 嘘に対して、あるいは嘘によって到来したあらゆる出来事からできている嘘の歴史 [une

histoire] (Geschichte)、他方で最後に、(3) これらの嘘、あるいは嘘一般の物語 [récit] を秩序づける真の歴史 = 物語 [une histoire vraie] (Historie, historia rerum gestarum) ¹²⁾

整理すると、histoire の意味として、1) Historie = 概念の歴史、2) Geschichte = 出来事からできている歴史、3) Historie, historia rerum gestarum = 物語を秩序づける真の歴史 = 物語、の三つが区別されている。文脈上、デリダはこの区別の可能性について疑問を提出しているので、この区別はデリダ自身の提案ではない。とはいえ、そうした留保を踏まえても、Historie の用法が初期とは異なり、「真の歴史」という新たな意味が付加されていることには注目してよいだろう ¹³⁾。

以上二つの箇所から、何らかの結論的な解釈を引き出すことは控えるが、少なくとも、récit と結びついた Historie の重要性が増していることは見てとれる。初期のデリダでは、Historie は知や学問と結びつき、エクリチュールと結びついた Geschichteの方がより根源的だとされていた。だが、エクリチュール = 書くこともまた、言葉を語ることに以外ではないとすれば、Geschichte の次元に Historie (物語と結びついた) の契機が最初から含まれていると言える。さらには、デリダが「出来事」として論じる贈与、赦し、告白といった事象や、「嘘をつくこと」にしても、総じて言語を発することによってなされる行為遂行的な出来事である以上、そこにもやはり「物語」の契機は不可避に含まれている。さらに、物語とアナムネーシスの結びつきが示唆されていることから、先述の系譜学的脱構築において、「物語」の役割はけっして無視できないだろう。

「物語を語ること (raconter des histoires)」の拒否から、アナムネーシスとしての「物語 (récit)」の(不可能な)発明へ——? デリダにおける〈歴史の思考〉の展開は、こうした道筋としても明らかにできるかもしれない。以上が、合評会を受けて、著者が垣間見ることになった可能性である。これ

を暫定的な結びとして、本書の補遺としたい。

註

- 1) Jacques Derrida, *L'écriture et la différence*, Éditions du Seuil, 1967. (『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年)。同書からの引用は以後、EDの後に原書／日本語訳のページ数を記す。
- 2) Jacques Derrida et Maurizio Ferraris, *Le Goût du secret. Entretiens 1993-1995*, Hermann, 2018, p. 79f.
- 3) Jacques Derrida, *Points de suspension. Entretiens*, Galilée, 1992, p. 396. (「パサージュ——外傷から約束へ」守中高明訳、『現代思想』1995年1月号、57-58頁)
- 4) Jacques Derrida, *Force de loi*, Galilée, 1993, p. 48. (『法の力』堅田研一訳、法政大学出版局、1999年、51頁)
- 5) Jacques Derrida, *Points de suspension*, op. cit., p. 396. (「パサージュ」、58頁)
- 6) Jacques Derrida, *Le monolinguisme de l'autre*, Galilée, 1996, p. 118. (『たったひとつの、私のものではない言葉』守中高明訳、岩波書店、2001年、118頁)
- 7) Jacques Derrida, *Points de suspension*, op. cit., p. 216. また、「寓話」の否定から「物語」の提起へというデリダの動向について次を参照。郷原佳に「L'enfant que donc je suis,あるいは猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」『現代思想』2015年2月臨時増刊号、90頁。
- 8) ヘーゲル『歴史哲学講義(上)』長谷川宏訳、岩波文庫、1994年、108頁。
- 9) Jacques Derrida, *Heidegger: la question de l'Être et l'Histoire*, Galilée, 2013, p. 157f.
- 10) 並置されている語のひとつ、résurrectionについては、本書189頁(2)も参照。
- 11) Jacques Derrida, *Donner le temps 1. La fausse monnaie*, Galilée, 1991, p. 155f. なお、引用文中の「GeschichteがなければHistorieはない」という文は、『ハイデガー講義』でハイデガー『存在と時間』を注釈する文中にも見られる(Cf. *Heidegger*, op. cit., p. 129.)。
- 12) Jacques Derrida, *Histoire du mensonge. Prolégomènes*, L'Herne, 2005, p. 33. (『嘘の歴史』西山雄二訳、未來社、2017年、27頁)
- 13) 同様に歴史の二義性を述べている箇所としては、次もある。「コーラ」および「秘密」は、「どんな histoire にも異邦的なままだろう。つまり Geschichte もしくは res gestae の意味においても、あるいはまた〈知〉と〈歴史的物語 [récit historique]〉(epistémè, historia rerum gestarum) の意味においても、異邦的なままだろう」。Jacques Derrida, *Passions*, Galilée, 1993, p. 62. (『パッション』湯浅博雄訳、未來社、2001年、61頁)

